

## 教育連携講座 吉村 雅仁 教授



# 新しい言語能力観と多言語教育

キーワード 複言語・複文化能力 / 言語意識 / 多元的アプローチ

### どのような研究をなぜ行っているか

現在私の研究課題は、複言語能力観に基づく言語意識教育およびその方法論である多元的アプローチです。複言語能力とはごく簡単にいうと図1のようなイメージです。この図は、例えば言語的少数派の子どもが第2言語を習得する際に、第1言語の能力が充分育成されていないと第2言語習得も制限されてしまうという説明などにしばしば使われるものですが、複言語能力もこれで説明するとわかりやすいと思われる。複数言語の共有基底言語能力が存在し、言語によって異なる部分が表層に現れていますが、これらすべてが個人の一つの統合された複言語能力というわけです。つまり、複数の言語の能力は別々ではないという考え方です。そして、複言語能力を活性化する一つの手段が、「言語に関する明示的知識や言語習得・教授・使用における意識的な認知や感受性」を促進する言語意識教育であり、「複数の言語を同時に使用する活動を含む」多元的アプローチと呼ばれる具体的な方法論なのです。

これまで私自身、例えば英語学習において、日本語能力と英語能力は全く別物で、ネイティブ・スピーカーを究極の目標とし、ゼロから英語を学ぶべきだと考えたこともありました。しかし、日本の言語環境や言語使用の必要性を考えると、いわゆる第2言語学習としての方法とは別の学び方を探るべきだと思い始めたのです。その答えの一つが上記の言語能力観に基づく多言語教育です。そこでは、多様な言語を比較し、共通点、相違点に気付くと共に言語そのものの理解や多様性に対する感性を高めることを目指します。学校教育においては、特に小学校段階でこれが有効ではないかと仮定し研究を進めてきました。また最近では、高校での多言語教育にも係わっており、包括的な言語能力、言語意識の変化を明らかにしようとしています。

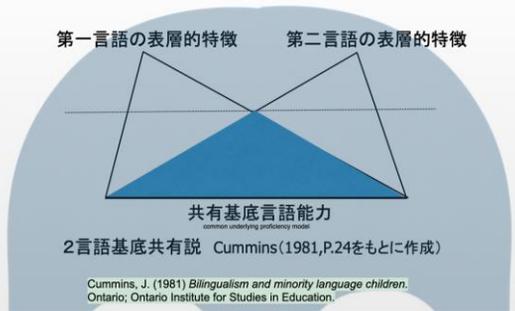


図1 複言語能力のイメージ

### 研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

学校教育現場での貢献として、複言語教育の発想は、言語教育のあり方を根本的に変える可能性があります。例えば小学校では外国語といいながら英語のみの活動・教科が始まっています。とにかく早く始めれば英語習得が可能になると信じられてるわけですが、複言語能力を伸ばす方がその後の新たな言語習得を促進するとも考えられます。日本の言語環境や担当教員の資質能力を考えると、複言語教育の方が最終的には子どもたちの言語能力全体を底上げできるかもしれません。

またもう一つ重要な貢献が可能です。近年学校や地域には、言語的文化的に多様な背景を持つ生活者が増えています。国語と英語のみの現在の学校教育では、彼らの言語や文化は全く見えない存在となり、場合によっては「邪魔なもの」のように扱われることさえあります。複言語教育で彼らの言語を扱うことにより、彼らにとっては自己肯定の機会を、多数派の日本人にとっては多様な言語あるいは文化にふれる貴重な体験を提供できることとなります。

### これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- ・「多言語を扱う教育実践：初等・中等教育の事例からその意義を考える」（ゲーテ・インスティトゥート東京、ドイツ学術交流会東京事務所主催「多言語教育の意義とは？ 外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム」基調講演，2020年10月31日）
- ・「小学校における多言語活動の実践：教材開発と教員養成・研修」（「慶應義塾大学外国語教育研究センター設立10周年記念講演会」基調講演，慶應義塾大学日吉キャンパス，2014年7月）